

オランダの戦後60周年は、5月5日の対独解放記念日でピークを迎え、8月15日の日本降伏記念日をもって公式には終わる。そして今、ここオランダでも歴史論議が巻き起こっている。

京都や奈良が空爆を逃れたのと異なり、連合軍の空爆によってドイツ・ザクセンの花の都ドレスデンは破壊しつくされ、多くの市民が犠牲になった。60周年を契機にこのような問題が、あらためて取り上げられ始めた。オランダでの歴史論議は、こうしたことと軌を一にしている。

オランダは1940年、ナチスドイツに占領された。占領下のオランダ国民は立派に振る舞ったとのイメージが強い。その象徴となっているのがアンネ・フランクで、匿ったオランダ人の勇気によって彼女の逃亡

オランダの戦後60周年とアンネ・フランク

歴史を問い直す眼差し



阿姆斯特ダムにあるアンネ・フランクの隠れ家。中央2軒の左側の家の屋根裏が隠れ家だった
写真提供：筆者

こまち きょうじ
駐オランダ大使
小町 恭士

生活は2年余り続く。

しかし、果たしてオランダ人のほとんどが勇敢だったのかという疑問が、今投げかけられているのである。なぜなら、大戦開始時にオランダに住んでいた14万人のユダヤ人のうち何と10万人ものユダヤ人が婦らぬ人となったからである。アンネの悲劇もオランダ人の密告によるものであったとされている。

同じように再評価の対象となっているのが詩人のカンベルトである。対ナチスレジスタンス運動に関する最も有名な詩を書いて国民的英雄となり、またユダヤ人の国外逃亡を手助けしたことで知られている。

しかし、収容所にいる間、生き残るために食料を得る目的で同僚を裏切り、ナチスに密告したという証言が明らかにされた。さらに、借金を抱え金繰りに困

っていたカンベルトは、ユダヤ人の逃亡にあたって金銭を受け取っていたことも報道されている。彼は裏切りに怒った同僚オランダ人によって収容所のなかで殺されたとされる。最近、明らかになったこのような事実の下で、今オランダでは彼の名を冠した文学賞の名前を変えることまで議論されている。

このようなオランダ社会の葛藤は、イスラム教における女性の扱いを批判した映画をつくったテオ・ファン・ゴッホ監督が昨年11月の白昼阿姆斯特ダムで暗殺された事件がえぐり出した問題とも、深層心理のなかで繋がっている。

これまでオランダ人は、自分たちの社会は異文化、異人種に対して寛容であると信じて疑わなかった。しかし、ゴッホ事件が突きつけたのは、果たして本

当にそうなのかという問いかけであった。つまり、一部には、オランダの寛容政策とはすなわち他人の運命に対する単なる無関心の現れではなかったか、との反省が生まれているのである。これには、上述のような戦争中のユダヤ人への対応も含まれる。

なお、南アフリカで有名になった黒人の隔離政策のもととなったアパルトヘイトという言葉は、隔離を意味するオランダ語である。

同 じくナチスドイツに占領された隣国デンマークでは、今回の60周年記念式典においてラスムセン首相がユダヤ人難民やその他の罪のない人をドイツに引き渡したことに對して公式に謝罪した。当時、約7800名いたユダヤ人のうち約7300名はデンマーク人の協力により国外に逃亡し、ナチスに捕まったのは485名であり、謝罪の対象となったのは21名とされる。

もちろん、デンマークにおい

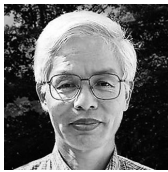
てナチスドイツは国王とその政府を残すなど、寛容な占領政策を遂行し、特に43年秋まではオランダのような厳しいユダヤ人政策をとらなかつたため、主としてスウェーデンへの国外逃亡が可能であった。ところが、オランダでは14万人という規模のユダヤ人人口についてデンマークと同じ対応を取ることにはそもそも無理であったことに加え、

ナチスドイツは初期の段階から水も漏らさぬ住民登録制度を利用してユダヤ人の撲滅作戦を展開したという差がある。そのなかでも2万8000人のユダヤ人が勇気あるオランダ人の協力を得て隠れ家などに潜み、1万6000人が生き残つたとされる。

このような背景の下で、もうひとつの隣国ベルギーのヴェルホフスタット首相は、同じユダヤ人への対応の問題をめぐって謝罪した。

そして、オランダのバルケネンデ首相は3月16日、エルサレムのヤド・ヴァシエム記念碑開

こまち きょうじ ● 京都大学法学部卒。1969年外務省入省。駐ロシア公使、国際協力事業団総務部長、外務省欧州局長、同官房長、内閣府国際平和協力本部事務局長を経て、2004年9月より現職



幕式でのスピーチで、占領中のオランダ人のユダヤ人に対する態度のなかには勇氣・同情に溢れるものもあつたが、同時に無関心、冷淡さ、裏切りもあつたと非を認めた。さらに同首相は、4月11日のアムステルダムにおけるユダヤ人社会の変遷に関するシンポジウムで、アンネ・フランクをかくまつた勇氣あるオランダ人もいたが、ドイツと協力したオランダ人の当局関係者がいたことを認め、その上、戦争が終了したあとオランダは解放され戻つてきたユダヤ人に冷たく、オランダ人は自分たちの苦難のことには注意を払つたが、他人のことには十分に耳を傾けなかつた、とも発言した。

実 はすでに2000年に、当時のコック首相は政府として、議会への書簡のなかで第二次大戦の犠牲者に対して、オランダ社会は長い間ほとんど理解を示していなかつた、彼らの苦悩にあまりにも形式的な官僚主義的対応をしたとして、こ

の問題に正式に謝罪している。このことは忘れられ、改めて今年の60周年という盛り上がりの中なかで今の首相は、上述のようなドイツとの協力者の存在まで認める発言をせざるを得なかつたのである。

さらに、オランダでは1945年8月17日のインドネシア独立記念日を未だに認めず、国連の休戦要請を踏まえて締結された49年12月27日のユリアナ女王による主権委譲の日を依然としてインドネシア独立の日としている問題もある。これが8月の60周年に向けて、今後どう議論されていくか注目される。

このように60年という年月は、少しずつではあるが、歴史を客観的に見させる方向で動いている。われわれも歴史に対してあくまで謙虚であるとともに、時の経過とともに物事は少しずつ客観的になっていくことに対して、もう少し自信をもつたらどうかと思う。オランダの悩みはそのことを教えてくれる。☺